総　　説

1　沿　革

古来南大東島は、琉球人の間でウフアガリ島として知られていたそうであるが、明治18年、沖縄県庁の探検により日本国標が建てられ、沖縄県に所属した。それより数年を経て本島の開拓を希望するものが続出し、6名の人によって開拓が試みられたが、島の周囲けんしゅんにして上陸出来ず、断念する者、上陸はしたが物資を放置して引き返す者、未着手のまま断念する者で何れも失敗に終わった。明治32年に至り、玉置半右衛門氏が本島開拓の許可を受け、郷里八丈島において同志を募り、60余日の難航海を経て現在の西港に上陸、開拓に着手したのが本島開発の嚆矢である。時に明治33年（1900年）1月23日、総勢23名であった。

当時は、原生林がうっそうと繁り、林間には鳥類が嬉々として、恐らく人間の征服を知る由もなかったろうが、開拓が始まるや住宅が建設され、密林を開き道をつけ、畑となし、適作物の試作及び栽培等と、開拓は進められ、2ヶ年目の明治35年には、人力をもって甘蔗を圧さく黒糖を製造して、砂糖の島として礎石をきずくに至った。

第一次開拓移住民23名に引き続き、第二次第三次と数次にわたる移住民を加え、大正5年頃には人口3,500人を数え、現在の保安林、防風林地域を除き開拓可能地の殆んどが拓かれ、かつての絶海無人の島も、開拓者の苦闘が報いられ、入殖以来10数年にして豊じょう楽土の地をきずくに至った。この間玉置商会が島の経営に当たっていたので玉置時代と称している。

大正6年に至り玉置商会が東洋製糖会社に事業権を売り渡したので東洋社の経営に移った。

東洋社は500屯分密工場を建設、大正7年より分密製糖を開始した。

昭和2年に至り東洋社が大日本製糖社と合併したのでそれまでを東洋時代、それから昭和20年までを日糖時代と称している。開拓以来40年余玉置商会、東洋製糖会社、大日本製糖会社（日糖興業）の経営する島で日本国中にも類例のない社会制度が続けられていたが、昭和21年（1946年）6月12日歴史的な村制が施行され、南大東村が誕生した。

これまで会社が経営した、教育、治安、交通通信、医療衛生等の公共事務は政府又は村に移り、新しい村づくりが始まった。

本村の基本的問題として、昭和26年来土地の所有権者である大日本製糖会社と折衝を重ねた農家の土地所有権問題も13年余の長年月を経て円満解決（請求農地は無償で農家に所有権を認定）農家それぞれの土地所有権が、昭和39年7月30日に確立した。これは村幹部を始め村民の一致団結と大日本製糖会社ならびに当時の為政者キャラウエイ高等弁務官の英断の成果であり「昭和39年（1964年）7月30日」この日は本村歴史の上に永遠に記念すべき日となったのである。

開拓以来唯一の産業である製糖業は、戦後、戦災で工場が失われたのと、食糧自給の必要から食糧作物を主体とする農業に転換したために中断したが、昭和25年（1950年）に至り、大東糖業社の分密糖工場が建設され糖業が復活し、我が国有数の砂糖の島である。

画期的な南大東漁港の建設に伴い、豊かな漁場の開発で水産業を興し、また島まるごとミュージアム構想を推進、農業・漁業・観光の振興で「安らぎと活力に満ちた美しいフロンティアアイランド」目指しています。

2　位　置

沖縄本島の東方洋上にあり、島のやや中央にある淡水池の沿岸が北緯25度50分47秒3，東経131度14分23秒7となっている。那覇から海路392kmとされ、北に8 kmを隔てる北大東島と相対している。

3　地　勢

本島は、標準的珊瑚環礁の隆起したもので東西5.78km、南北6.54km、周囲20.8km短楕円形で海岸線から内側に環状に露出した岩石地帯があり、この地帯を利用して二重又は三重に防潮防風林が設置され、耕地を囲んでいる。最内側の防風林から内部を幕下、外部を幕上と区別し幕上は環状丘陵地帯、幕下は盆地となっている。

山はなく一番高いところが標高75.8ｍで大体平坦地である。島の各所に鍾乳洞があり中央部には面積47haもある大地を始め、多数の池沼が散在している。島の総面積は30.57㎢でその約6割が農耕地となっている。

4　気　候

本島は亜熱帯海洋性気候で冬でも植物の落葉は少なく割合に温暖である。夏期には海風によって炎暑も和らげられている。冬期は北東季節風が、夏季は南東季節風が吹き、気候は完全に区別される。

年間降水量は1.700ミリ内外で沖縄本島や宮古島より少ない。夏から秋にかけては台風シーズンで、ラジオの天気予報に一喜一憂、台風が少ないと高温な天気がつづき、干ばつとなりこれまた恐れられている。

5　交　通

南北両大東村の出資による大東海運ＫＫによって定期航路事業を経営、定期船だいとう(699ｔ)が月に約5航海運航、生産物の砂糖は砂糖積出専用船を臨時配船して出荷しているが、本村の港湾事情が厳しいために不便な海上交通を余儀なくされている。

航空交通は、ＤＨＣ－８型機が毎日２便運航している。

6　村行政

村役場事務は三役のほか、総務課、福祉民生課、産業課、土木課、港湾業務課、空港課、企業課の機構で執行し、各字（６字）には区長を置き行政事務の便を図っている。

その他に教育委員会、選挙管理委員会、監査委員、農業委員会、固定資産評価審査委員会がある。議決機関の村議会は定員８名の議員で構成されている。

7　教　育

学校は、小学校と中学校の併置校で、義務教育が行われている。

就学前の幼児教育は村立の幼稚園で、４才児、５才児の２ヶ年保育が行われ、上級学校進学は島外に送り出すので、「離島苦」の要因となっている。

8　保育所

村立のへき地保育所１ヶ所で１歳、２歳、３歳児の保育を行っている。

9　情報・通信

郵便局が設置され郵政業務が行われ、電信電話業務は、ＮＴＴの南大東無線中断所で行われている。テレビは、ＮＨＫ・ＢＳ１・ＢＳ２。総合テレビ・教育テレビの４局と民放ＴＢＳテレビ・

テレビ朝日・フジテレビの３局の放送があるが何れも東京の放送である。携帯電話（ＮＴＴドコモ）も通信可能である。

10　治　安

那覇警察署管下の警察官駐在所が設置され、治安が維持されている。

11　医療衛生

県立那覇病院管下の診察所が設置され、診療業務が行われている。村立歯科診療所で、歯科診療が行われている。救急患者は自衛隊の急患搬送に依存しなければならない。実状であり「離島苦」の原因となっている。

12　気象観測

南大東島地方気象台が設置され、気象業務が行われている。（昭和 17 年観測業務開始）

13　県機関駐在員

県農林水産部所属の農業改良普及員１名が村役場に駐在している。

14　協同組合

沖縄県農業協同組合南大東支店によって、協同組合事業が行われている。

15　会　社

大東糖業株式会社の850屯製糖工場が設置され、製糖期（毎年１月～４月）になると、昼夜の別なく分蜜糖製造が行われる。

16　電　気

沖縄電力株式会社南大東電業所によって、常時電気が供給されている。

17　水　道

村営の簡易水道事業によって水を供給している。（海水淡水化簡易水道）

18　廃棄物処理

し尿は委託業者が汲み取り収集し、貯溜タンクで腐塾させて農地還元処理をしていたが、字在所と字池之沢の１部集落地域は生活排水も含めて、集落排水事業（下水道）で処理している。

ゴミは委託業者が収集して燃やすゴミはクリーンセンターで焼却、燃やさないゴミは集積場に集積をしている。

19　その他の公共施設

離島振興総合センター・ふるさと文化センター。保健センター・高齢者生活福祉センター・国民運動場・スポーツセンター・スパーク南大東（屋根付ゲートボール場）・フロンティアロード・フロンティアパーク・海軍棒海水浴場・塩屋海水浴場・ひかり公園・月見ロードパーク・星野洞・ふれあい広場・児童館・ビジターセンター等が設置され、それぞれの目的を達成するために活用されている。

20　団　体

南大東村青年連合会、南大東村婦人会、南大東村体育協会、南大東村老人クラブ、南大東村小中学校ＰＴＡ等の組織がある。

21　社会福祉

社会福祉法人南大東村社会福祉協議会で社会福祉事業が行われている。

22　商工会

南大東商工会（会員 93 名）で、商工業の振興発展を図っている。

23　神社仏閣及び史跡

字、池之沢の大神宮山と称し樹木が生茂る小丘には、大東神社があり、島の氏神として毎年 9 月 23 日には盛大な祭典が行われ、年中の最大行事となっている。大神宮山の北側観音山の岩穴内には観音菩薩が安置され、西海岸には、金刀比羅宮、字新東の秋葉山には秋葉神社があり、毎年例祭を行っている。瓢箪池の月見橋を渡って、旧東に通ずる村道を行くと、一法山信天院大東寺の跡がある。小中学校々庭松林には、島の開拓者玉置右半衛門翁の記念碑と、初代校長沖山岩作先生の記念碑がある。西海岸墓地には、今次大戦による陸軍関係戦没者の忠霊塔、また秋葉山には、海軍関係戦没者の忠魂碑がある。

北海岸の防風林（異人穴）には、明治 24 年に漂流難波した米国船キセップ号の乗組員を救助した記念碑がある。

東海岸岩礁地帯の高所には、明治 25 年海門艦長紫山海軍大佐が探検した記念として建てた碑があったが今次大戦で失われたので史跡保存のため新たに記念碑を建立した。その附近は海軍棒と称してある。

西海岸（西港）を上陸して間もなくの地点に、明治 33 年初めて住民が上陸した記念の上陸記念碑がある。そのすぐそばには石の地蔵さんが道路際に、なかよく並んで建っている。尚、フロンティアパーク内には開拓 100 周年記念碑等が建立された。

明治 18 年に建てたという国標はその形跡が無いので、平成 5 年に新しく建立した。

17 世紀の末葉、大東島附近を航海した船が難破し、オランダ人 36 名が島に上陸し次々と餓死、35 人は形ばかりの墓石が建てられて最後の 1 人は空しく海風にさらされ白骨となったという伝説があるがその形跡も失われ、不明である。

産業の概況

本村では、サトウキビ（甘蔗）作農業が基幹産業であり、サトウキビ作農業の振興即、村の振興発展につながると言っても過言ではない。

1　農　業

農家戸数 217 戸で 1 戸当たり経営規模は、8.2ha 余で経営耕地面積は広く我が国では例の少ない大型機械化一貫作業体系による大規模経営が確立している。今後尚一層、農業基盤の整備、土づくり、病害虫防除等積極的に推進し、生産性の向上を図ることが課題である。畜産は、戦前戦後盛んであった役用牛馬は、農業機械化に伴い毎年減少し、最近は農家の副業として肉用牛と山羊を主とした畜産が行われている。

2　水産業

近海は、マグロ、サワラの豊富な漁場であるが、港に恵まれないために小型ボートによる漁獲で、村内需給と若干の村外出荷から見られる小規模漁業経営を余儀なくされている。

しかし、平成元年度から着工した南大東漁港の建設は本村の漁業振興開発と近海で操業する漁船の避難や寄港及び前進基地となって将来大規模な水産業の開発が期待されている。

3　商　業

農業協同組合における生産、消費物資の供給とスーパー及び商店等で生活必需物品が供給され、飲食店、修理工場など、それぞれ村内需要を充しているが、諸物資の海上輸送費及び陸揚費のコスト高の関係から物価高である。よって円滑な定期船運航と港湾の拡充整備に努めている。

4　製造業

製糖工場では毎年７千トン内外の砂糖と２千トン内外の糖蜜を製造し、有史以来の基幹産業となっているが今後ともその方向に変わりない。原料であるサトウキビの増産のための農業振興を図り、又港湾の整備によって砂糖の積出しの合理化を図る。

5　流　通

金融機関としては、農協と郵便局が各１ある。生産物の砂糖は本土商社へ、その他の農畜産物と漁獲物が沖縄本島へ少量の出荷が見られる。生産及び生活資材一切沖縄本島から移入している。

6　観　光

神秘な石の芸術を営々と今も製造し続ける「星野洞」や貴重な自然と動植物に恵まれ、観光、探検、学術調査に期待されている。

7　航　路

イ　海　路

那覇市泊港～南北大東間に定期船大東海運のだいとう（699）屯　定員55人）が運航、月間運航回数は５回強である。

ロ　空　路

那覇空港～南北大東間に琉球琉球エアーコミューター㈱ＤＨＣ－８型機、午前便は那覇・南大東往復便（週７便）があり、午後便においては（火、木、土、日）曜日が南大東先行、北大東経由、（月、水、金）曜日は北大東先行、南大東経由の運航で（週７便）合計14便運航している。

8　島内交通

バス、タクシー等の公共運送事業はないが、レンタカーの営業を２社が行っている。現在、軽車両及び普通乗用車が950台余、単車が350台余ある。有償運送事業でマイクロバス等が運航している。

9　問題と対策

基幹産業であるサトウキビ作農業の生産向上と安定的発展を図る諸施策を積極的に推進し、名実とも「砂糖の島」の確立に努めなければならない。

その対策として、土地改良事業を積極的に推進し抜本的施策としては、農業用水の確保を図り、水利用が可能な農業の実現に努める。

また、漁港の新設で漁業の新規開発を図り、サトウキビ作農業と新らたに水産業を加えた産業を基幹としながら、島まるごとミュージアムで観光を興し、自給自足ひいては島外出荷向けの農産物や、水産物の開発にも努め将来の経済基盤を確立する必要がある。なお、離島なるが故の離島苦を解消するための基本的なことである海と空からの交通の改善と、情報通信基盤の拡充整備が必要である。